

ハイデルベルク信仰問答より

問 95 何が、偶像礼拝ですか。

答え 御言葉のうちにご自身をお示しになられた唯一の真の神の代りに、さらに加えて、自分の信頼を置くものを考えたり、持ったりすることです。

「偶像」という概念は一神教ならではものと言えるかもしれませんが。そもそも日本人はその DNA に多神教的宗教観が染みついているため、「他の神」とか「偶像」という概念すら持たない人が多いでしょう。何人もの「神様」がいて当然であり、「魚の骨も信心から」とも言われるように、ポイと捨ててしまうようなものでさえ拝む対象となりうるのです。そこから来る「和の精神」は、良くも悪くも連帯意識を育み、他の人がどう行動しているかを横目で見、空気を読んで、できるだけ集団行動からはみ出ない生き方を選択させています。その意味で、日本人は唯一なる神様との人格的交流というものを理解しにくい面があるのです。

ユダヤ教、イスラム教、キリスト教は、旧約聖書を經典としている点で共通しており、その原則には一神教があります。一神教は支配の道具として利用されやすく、異教徒の撲滅という大義名分によって多くの負の歴史が築かれてきました。「唯一なる神を愛する」ということの本質を今一度考えてみたいと思います。

問 95 では、偶像礼拝が何であるかが問われています。その前提には、ヤハウェなる神様がイスラエル民族を奴隷生活から解放してくださったという恵みがあります。まず神の側がイスラエルを愛されたのだから、イスラエルも全身全霊で愛し返すことが求められたのです。これは夫婦の關係に置き換えてみると分かりやすく、一人の配偶者だけを愛することによって夫婦の絆は強まりますが、その間に何者かが入り込むと二人の關係にはヒビが入ります。ただ一人の妻／夫を愛することと、ただ一人の神を愛することの間には、同質の真理があると言えるでしょう。

本問答の答えでは「御言葉のうちにご自身をお示しになられた唯一の真の神の代りに、さらに加えて、自分の信頼を置くものを考えたり、持ったりすること」が偶像礼拝だと言われています。イスラエルの民が最もあからさまに偶像礼拝を行なった事例としては、モーセ不在のときに金の子牛を作って拝んだ出来事が挙げられるでしょう（出 32 章）。また、ヤロブアム一世がベテルとダンに金の子牛の像を据えたことも同様の背信行為と言えます（I 列王 12:28-33）。旧約聖書全体を読むと、このように具体的な像としての偶像を民が繰り返し作っていたことが分かります。つまり偶像礼拝とは、まず心においてヤハウェなる神様だけに信頼することをやめ、それを形として表すことと言えます。新約聖書では、形ばかりでなく精神レベルの問題としての偶像礼拝が問題視されるようになります。

誰も、二人の主人に仕えることはできない。一方を憎んで他方を愛するか、一方に親しんで他方を疎んじるか、どちらかである。あなたがたは、神と富とに仕えることはできない。（マタイ 6:24）

ここでは「神と富」が二者択一的に並べられていますが、「富」という語は原語では「μαμωνᾶς」（マモナーズ）であり、「富」「富と物欲の神」「宝」「財産」などを意味します。人間が富を偶像化しやすい理由は、この世に対する執着心を助長するものだからでしょう。主イエスは「この世の宝」は錆びて虫が湧くと言っておられます（マタイ 6:19-21）。神ならぬものに心を向けるとき、人の心もまたその「宝」とともに滅びるということでしょう。人は神と富の両方を両立しようとするのですが、富はいつの間にか神を見えなくさせてしまうのです。

「マモン」は更に適用範囲が広げられ、仕事、趣味、特技、家族、美貌など、時には形のないものまでもが偶像になりうるという話にも進んでいきます。人が心の中で神以上に大切にすることはすべて「マモン」なのです。そして、その最も中心にあるのは「自己」であり、アダムとエバが陥ったところの「自己神論」、神のことばではなく自分の言葉、神の判断ではなく自分の判断によって人生を決定していくことこそが偶像礼拝であります。そして、その偶像礼拝へと誘っているのがサタンだということになるでしょう。